

2020年度狛江市立第3小学校6年生 平和学習に話し手として招待されました

狛江市で平和に取り組んでいる団体の一つとして、直接戦争体験がなくても活動している動機などを話して、子どもたちにもできることはないのか考えてもらう機会を作って欲しいとの依頼でした。そこで、年代の異なる3人、大熊啓実行委員長（父親世代）と西尾真人（おじいさん世代）、佐久間文音（大学生。お姉さん世代）で、全12回の平和授業の第11回目、2月25日に伺いました。

お話はクラスごとに、6年3組、2組、1組の順に行いました。

最初に西尾から、平和フェスタは狛江市平和都市宣言の普及と宣言内容の実行を目的に活動していること、小学生当時に住んでいた荒川区日暮里の戦後風景（傷痍軍人の姿等）を伝え、今はいじめや差別など見えにくい社会ですが、自分が感じたことを大事にして声を出し、日々安穏と暮らせる平和な社会を作って欲しいと訴えました。

佐久間は実行委員会に入った原点を述べました。小学生の頃に七夕に「世界平和」を願ったのですが、それは「はだしのゲン」などの映像を観て怖かったこと、そして絵本「地雷でなく花をください」と出会ったことがきっかけでした。演劇部での活動を生かして、その絵本を朗読しました。「怖い」だけを自分の中に閉じ込めずに、発信してくださいと結びました。

大熊は二人の話を受けて、3小の校歌から始めたり、「HEIWA の鐘」から始めたりして、その曲が生まれてきた経緯と平和への思いを丁寧に訴えました。そして原爆で20万人の人が亡くなったという数字の大きさではなく、20万人の一人ひとりの命が絶たれたこと、一人ひとりの人生が失われたことを想像して欲しい。被爆者（や戦争経験者）はこれから急速に減っていきます。経験しないと分からないのではまた原爆を落とすのでしょうか？そうではないですね。私たちは被爆者の話を聞き、戦争の悲惨な状況を想像することができます。再び経験しなくても、想像することで、核兵器をなくし平和な社会をつかっていきたいと思います。その想像の大切さを訴え、「ひとつぶの涙」を歌い、終わりに「水と緑のまち」の作詞者、故加藤弘さんが生前に語っていた「平和への思い」を話しました。

お別れ時には「小学生も実行委員に歓迎です！」と一言。

戦争の恐ろしさを知り、平和をつなぐ

当時第6学年担任 松村 隆寛

昨年は戦後75年の節目の年でした。戦争を体験された方々の高齢化が進み、近い将来、戦争の“本当の”恐ろしさを知る方々から直接お話を伺うことが難しい時代を迎えようとしている中、未来に平和をつないでいくためにはどのような学びが必要か考え、学習の展開を構想しました。

戦争の悲惨さや平和の尊さを、より自分事として捉えることができるように、全学年で平和学習に取り組んでいる長崎市の子供たちの学びを取り上げたり、被爆を体験された方のお話を聞いたり工夫しながら学習を行いました。子供たちは真剣に学習に取り組み、学びを深める様子が見られましたが、「自分たちが平和をつなぐ」という意識までは高まっていないように感じました。

そこで、実際に平和をつなぐための活動をしていच्छる、こまね平和フェスタ実行委員の皆様にご協力いただき、大熊さん、西尾さん、佐久間さんお三方の想いを子供たちに語っていただきました。子供たちの感想文の中には、

「自分にも何かできるのではないかと感じた。」

「まずは身近な人から、平和の大切さについて伝えていきたい。」

といった記述が多く見られ、お三方のお話が子供たちの「行動に移してみよう」という意欲の喚起につながっていました。このとき抱いた思いを忘れずに、子供たちがこれからの人生を歩んでいってくれたら幸いです。変化の激しい現代社会ですが、「平和」だけは不変であることを切に願い、私は今後も学校教育を通して平和の尊さを発信していきたいと思ひます。

結びに、大変お忙しい中、子供たちのためにお力を貸して下さった大熊さん、西尾さん、佐久間さん、この度は誠にありがとうございました。

ムクムク、モコモコ

こまえ平和フェスタ2021

実行委員長 大熊 啓

ムクムク、モコモコ。

大人の話すひとつひとつに、子どもたちの心のあちこちが、出っ張ったりへこんだりする音が聞こえるようでした。狛江第三小学校6年生の皆さんに、「こまえ平和フェスタ」の事を、実行委員の西尾さん、佐久間さん、そして大熊がお話しさせていただいた時の経験です。西尾さんご自身の目を見た戦後間もない風景、浮浪児や傷痍軍人の姿を、佐久間さんは絵本の読み聞かせで、地雷で吹き飛ばされ、手や足や、生命を失った人々を、そして私は、広島・長崎で原爆の炎に焼かれ命を奪われた何十万という人々の話をしながら、なぜこの狛江で平和フェスタを取り組むのかを語りかけました。西尾さんご自身の体験ですが、佐久間さんや私はその場面を経験した訳ではありません。子どもたちはどれも、実際には見たことのないものです。しかし、「想像してみよう」と呼びかけると、子どもたちの心はしっかりと反応していました。悲しい過去を繰り返さないためには、過去を知り、過去を想像し、そこから未来を創造しなければならないと思います。

私たちの話が、少しでも子どもたちの心に残れば、今は何も感じなくても、あるときふと、どこかに引っかかって、考えるきっかけになるかもしれません。真ん丸はきれいですが、ちょっとした拍子に転がって行ってしまってもいい。でも少しでも出っ張りやへこみがあれば、止まったり、向きを変えたりすることもあるかも。

沢山出会い、沢山想像し、色んな形の心を育てて欲しいと思いました。

ムクムク、モコモコ。

終戦後、数年経った下町 私の原風景

実行委員 西尾真人

昨年、コロナ感染症拡大のために 2005 年以來、毎年続いていた平和フェスタを見送ることになりましたが、その代わりとして初めてニュースを発刊しました。それが当時 3 小に勤務されていた松村先生の目に留まり、「それでも平和の発信をする決意」をする実行委員会に関心を持たれ、担任していた 6 年生の平和学習に声を掛けていただきました。結果として、おじいさん世代、お父さん世代、お姉さん世代でお話をさせていただきました。私は終戦後 7 年ほど経った東京下町の浮浪者・児、傷痍軍人の物乞い、近くにあった朝鮮初等中等学校への関心など印象に残っている戦後風景を中心に話をさせていただきました。体が貧弱で戦争になれば真っ先に殺されるか餓死する、生き残るには戦争をしないことと幼いながら考えていたこと、当時に比べ今は平和を脅かす様々なことが分かり難くなっている。例えばいじめのようなことが分かれば、しっかりと見つめて欲しいと話しました。

感想文の中に、話したことが印象として残された子もいて、嬉しいです。声を掛けていただいたことに感謝するとともに、これからも機会があれば話していきたいと思います。

私が伝えたかったこと

実行委員 佐久間文音

この度、平和教室に参加させて頂き、小学生の皆さんに平和についての想いをお伝えできたことを大変光栄に思います。

平和について、何を伝えるか考えた時、ふと思い出したのが柳瀬房子さんの”地雷ではなく花をくださいサニーのお願い”という本でした。幼い頃から読んで貰っていた本で、当時は温かい雰囲気絵が好きでした。その頃は幼いながらも、地雷の怖さを感じ取っていたのですが、大人になって改めて読み返すと、地雷も無く、争いのない日本で暮らせていることへの感謝の気持ちと、その有り難さ、自分には何ができるのかと考えさせられました。私の想いは小学生達にも届いていたようで、平和であることの大切さに気づいてもらえたことが本当に嬉しく思います。

この日の経験を今後の生活でも生かし、自分の子供や孫、友人と多くの方に平和の有り難さを伝えて行きます。